

天文学とプラネタリウム

第75回



今月のお題

「はやぶさ」が届けてくれたもの



天文・宇宙開発ファン以外にも大きな盛り上がりを持って迎えられた探査機「はやぶさ」の帰還。これを上手く活かしたいですね。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (台湾 中央研究院)

8月の六本木天文クラブ開催日時決定!

2010年 宇宙の旅。

6月13日、始まったばかりのサッカーワールドカップと並ぶほどの注目を集めたイベントは、JAXAの探査機「はやぶさ」の地球帰還でした。多くの人がネット中継に殺到し、小惑星イトカワへの往復7年に及ぶ旅の最後に光輝きながら凱旋する「はやぶさ」を見守りました。

皆さんもご存じのとおり、苦難の運用の連続だった「はやぶさ」の旅路に共感する人も多く、擬人化された画像や動画が数多くつくられ、これまで惑星探査や宇宙開発に興味のなかった人にもまで浸透していったようです。短いメッセージをやり取りするサービス Twitter では、ピーク時にはワールドカップの話題よりも「はやぶさ」の話題の方が多く投稿されていたという調査もあるようです。野口宇宙飛行士の国際宇宙ステーション滞在や金星探査機「あかつき」等の打ち上げもあり、狙ったわけではない(とつかむしろ狙えない)にせよタイミング的にもばっちりでした。

この盛り上がりに対して、本質的でないと不快感を抱く方もいらっしゃるようです。確かにこの盛り上がりはミッションの中身そのものからすれば本質的ではないのですが、一方で多くの人の支持を(正しく)得るということは長い目で見れば宇宙開発や惑星探査にとって本質的に大切なことかもしれません。今は「はやぶさ」の効果もあって多くの人の関心がその分野に向いていますが、その状態はそんなに長続きしないはず。この機会をとらえて波乱万丈の物語だけでなく「はやぶさ」そのものの工学的・理学的価値をうまく伝えられれば、今後の探査の礎となるべき「実験機」としての役割が別の意味でも達成されることになるでしょう。

そんな分野と立ち位置の近い天文学でフィールドで活動する私たち天ブラの活動のモットーは、来る人を待つのもなく、欲しがらない人に押し付けるのでもない、「相手が手を伸ば



もう一つ話題になった、月と金星の接近。単に接近をめぐるだけでなく、こうして並べて月と金星の動きについて考察してみるのも一興。

せば届くところまで持っていく」です。私たちが星の一生を印刷したアストロノミカル・トイレットペーパーを作った時にも「研究成果をこんなものに印刷するなんてけしからん」という声を一部から頂きましたが、その話題性をきっかけに手に取ってくださった方も多かったのも確か。話題性とその中味とのバランスが大切だなとその時痛感したことを思い起こさせてくれる、今回の「はやぶさ」帰還劇でした。